

する。もつとも、ダイヒグレーバーはこの文書の成立を紀元前五世紀の早い時期としており、それに従うなら、実際にそこには、ヒポクラテスの活躍した時期（前五世紀後半から四世紀初頭にかけて）よりかなり以前の状況が反映していることにならう。その点からも、ヒポクラテス本人がこの「誓い」を作成したと考えることはできない。だが、先にその一端を指摘したように、「エピデミアイ」諸篇をはじめ、後の医学の代表的な医書のなかに「誓い」の内容と関連する記述がみえることは、そこに明示された医療の原則を彼がはつきりと受けついでいることを示している。その意味で、ヒポクラテスの医の精神は、やはりこの「誓い」に表われているといつてよい。

（東京大学人文科学研究科大学院）

アンブローズ・パレの処女出版 とその背景

大村 敏 郎

明年一九九〇年はアンブローズ・パレ (Ambroise Paré, 1510-1590) の没後四〇〇年の年に相当する。近代外科の父として、また日本に伝わった西洋外科の源流として、この節目の年にパレを顕彰することを計画しており、本学会・日仏医学会・日本外科学会を通じて準備を進めているところである。

榎林鎮山（一六四八～一七一）の『紅夷外科宗伝』（一七〇六）・西玄哲（一六八一～一七六〇）の『金創跌撲療治之書』（一七三五）・伊良子光頭（一七三三～一七九九）の『外科訓蒙図彙』（一七六七）、この三書はいずれもオランダ語訳の『パレ全集』をもとにした書物であることが知られている。しかしいずれの著者も、その内容を、オランダ人によってもたらされたオランダ医学として理解してお

り、原著がフランス人によるフランス語版であったことは知らなかったようである。

オランダ語訳は一五九二年に完成しており、日本に到来したのはその一六四九年版であることが記録されていた。

実はこの年に同じアムステルダムから二つのオランダ語の『パレ全集』が出版されており、日本に届いたのは新しい木版の絵を使いはじめたシッペル (Schipper) 版の方であることを、カスガイ膏の針の図から解明して、以前関西支部会で発表したことがある。(一九八〇)

いままでわが国でパレの文献を論じたのは、オランダ訳本の種本になった一五八五年の第四版フランス語版、あるいはこれを一八四〇〜四一年にパレの没後二五〇年の時を記念して、ジョゼフ・フランソア・マルゲーニユ (Joseph François Maigne, 1806—65) が編集しなおした『完全本』を中心にしたものであった。

第四版は、「私が処置をし、神がこれを癒し給うた」という名言のはじめて登場する版で、パレ生前におけるもっとも充実した版とすることができる。英語訳はずっと遅れて一六三四年になされた。これを利用している研究者も

多い。

全集の初版は一五七五年であるが、全集に至るまでにパレは七冊の単行本を出している。これ等は版を重ねたり、他の国語に訳されたりしているので、種類を正確に把握するのは困難である。

今回はパレの処女出版について、その背景をさぐってみたい。書物の名は『火繩銃その他の火砲によって出来た創傷、並びに矢・投槍・類似のものによる創傷、さらに火薬による特別な火傷の治療法』という長いもので、一五四五年に出版された。パレの肩書はバリの床屋外科医 (Maître Barbier Chirurgien) になっている。

これらの処置はフランス国王フランソア一世 (François I, 1494—1547) の軍団に軍医として従軍して、イタリーのピエモンテ地方のトリノの戦場において体験したことをもとに書き上げたものである。

鉄砲傷の処置に煮えたぎった油をかけたたり赤く焼けた鉄で焼灼したりする代りに、テレピン油とバラ油と卵黄で作った軟膏をぬる治療法を考案したことが述べられている。

この本の出版には、かつての恩師ジャック・デュボア

(Jacques Dubois, 1478—1555) の励ましがあった。遠征からパリに帰ったパレを招き、戦場での体験や開発した医療の話に耳をかたむけてくれたのである。その中には、体内に残っている弾丸を除去するには撃たれた時と同じ体位にすれば抜きやすいこと、それに応わしい鉗子の考案、また火薬には特別な毒性はないので過剰な処置の不要なことなどが含まれていた。デュボアは、まだ床屋外科医の資格すら取っていない(取得は一五四一年)この若者パレの観察力と努力を高く評価している。

デュボアはフランス名だが、同一人物がヤコブス・シルヴィウス (Jacobus Sylvius) とどうラテン語名で、アンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514—64) のパリでの解剖学の師としても登場してくる。

ヴェサリウスは一五四三年に『ファブリカ』を出版しているが、二年後のパレの外科治療の本には何も影響を及ぼしていない。一五六一年の『一般解剖学』の中にはヴェサリウスの解剖絵図を取入れている。

幼年期にラテン語を学びそびれたパレはフランス語で論文を書いたが、当時のラテン語に代って各国語を公用語に

しようという気運や、フランソワ・ラブレール (François Rabalais, 1494—1553) のフランス語運動が強力な味方になったようである。後に全集を出版した頃にはパリの医学部から、教授の協力なしにラテン語でない医学書を書いたことで、二度も発禁処分を受けそうになった。処女出版の頃にはそのような抵抗はなかった。医学部教授であったデュボアの後押しが強力だったというよりも、医学部がパレの存在に脅威を感じていなかったなのであろう。

パレの処女出版は、二年後にオランダ語に訳されアントワープで出版されている。パレの本に対してオランダは常に対応が早いのである。

(慶應義塾大学医史学教室)